

雪の日に



小泉庸子



今日も昨夜に降った新雪で垣根も遊具も白く綿帽子につつまれている。登園してすぐテラスから中庭を見ていた三歳児の由美子は、突然「先生、大事件、大事件、早く来て」との声に、室内にいた子どもとテラスに出て見ると、中庭の門が開いている。（ここは通用門ではなく非常出口用の門である）そして、点々と一人のくつあとが続ぎ、庭を一周して出て行っているのであった。

由美子が「ね、大事件でしょう。誰れか幼稚園に入って来たんだよ。誰で

しょうね」と云うと、そばにいたやはり三歳児の和生が「うんたしかに長ぐつのだとだ」と云うと、やはり三歳児の守央がすかさず「きつねかな」と云った。すると和央が「きつねより大きいよ」守央「くまかな」和生「熊じゃないよ」とどこかで聞いたことのある会話をしている。と由美子が「わかった、サンタクロースのだ。グリとグラのお家になってたでしよう」と云った。和生は「うん^{（そうだよ）}だよ。クリスマスの時サンタクロースここ

から入って来た^(きたもんね)つきや」。守央「うんだつきや、後ついて行けば、サンタクロースのお家に行けるよきつと」。守央の確信にみちた言葉は、そこに居合せた子ども一同の確信でもあるように感じられた。

子どもたちの会話を考えてみると、先月のクリスマスには、サンタクロースがこの門より帰って行くのを皆で見送ったのだった。その経験と、絵本「グリとグラのおきやくさま」の経験が、重なり、絵本の会話がそのまま生きて対話され、三歳の子等にとり、大事件であり発見の喜びでその日の遊びは、積木でグリとグラの家を作る者や、雪だるまを作って楽しむ者などで、豊かな楽しい一日であった。(駄足であるが、そのくつ跡は大人のものではなく、小学生低学年程度の小さいものであった。)

私の勤務している園は、津軽富士といわれる岩木山の姿が美しく見え、リンゴの故郷、弘前市の新興住宅地の中央に位置し、幼稚園の前は、団地の中央児童公園となっており、この公園には、桜、かえで、もみじなどの木、又、小山が二つあり、夏はころげまわり、かくれんぼをし、冬はスキーや、ソリのスロープになり格好な場所として利用し、比較的に自然と空間に恵まれた中に立っている。園児は八〇名、三歳、四歳、五歳と三クラスで構成さ

れ、園児のほとんどは、子どもの足で十五分以内のところから徒歩で通園している。

十一月末には雪が降り、卒業の三月末にもまだ庭の芝生が見えない年も多く、また、一夜に三十センチ以上雪が積ることもめずらしいことではないのである。この一、二月の季節は、雪、雪、雪という生活で室内にとじこめられてしまおうと考えるのは大人で、子どもたちはこうした生活の中でも持ち前の天才的、想像力と創造力で次々に遊びを作り出し、考え出して行く。特に子どもは「風の子」のことは通り、雪が降って喜び、少しぐらいの吹雪でも外で遊びたいと云うのである。停電でボイラーが回らなく、暖房が切れて降園時刻を早めた時など、「大丈夫だよ、僕たち外で遊ぶから、お部屋寒くたって。だから幼稚園にまだいてもいいでしょう」などと年長組から抗議を申し込まれたりするのである。

毎年、クリスマスの園児たちへのプレゼントは、母たち手作りの物をソリにつけて、サンタクロースが引いて来ることにしている。そしてそのソリもプレゼントとして置いて行くのである。こうして毎年ソリを買いたして三十台程あり、好天の時など、全クラス(希望者のみ)で前の小山へすべりに行くのである。

津軽富士が白く輝いて見える日など(この地方はこの山の見え

方によって天気を予測する）家を出る時からソリ遊びときめているらしく、働きのケイティ（除雪ブルドーザーを絵本の愛称のように子どもたちは言っている）が通った道を元氣にかけて来、あいさつのかわりに、「ケイティのおかげだね。今日も又前の小山に行こうね」と念をおされるのである。ソリは毎年少しずつ改良され、すべりよくなっている。年長組はどのソリがよくすべるか、どのソリは前へも後へもすべるかなどを知っているのである。登園早々から、雪あそびの道具（我が園特製、母の手製で、くつに雪が入らないようくつカバーと手袋である。子どもはどんな深雪でも、むしろ人の歩いていない新雪を歩くことを好み、長ぐつに雪が入り、くつもくつ下も、ズボンもぬらしてしまう。手袋も登園までの道のりでぬらして来る子もめずらしくなく、雪あそびをした日は降園時まで乾かないため各自替えを園に置いておく）を用意する。

身仕たくをした子らは「先生まだ？ 前のお山に行ってもいい」などと、担任をせめるのであるが公園は園の外であり、目もとどかないので、子どもだけでは行けないことにしているのである。またその日の天候や雪質により、アイスバーンになっている時などは、少しとけてやわらかくなるお弁当後とか、新雪の深雪の時は、年長の男の子と用務のおじさんと下調べとしようして地固め

に出かけるといふふうになっている。

年長組の男の子等は、ソリの乗り方もいろいろ工夫したり変化させ、スロープに大きなギャップを作り、高くジャンプすることや競ったり、又乗りながら体重を右や左に移し、前の綱でかじを取るとカーブすることを体得し、下まで降りる間に何度カーブ出来たかなどを競ったりするのである。

我が園きつてのスポーツウーマン、スキーのベテランN先生が男の子等に教えられ、何度やってもすぐ真直ぐ行ってしまう、その度「そうでなく、もう少し体をそっちにまげて」とか子等に叱咤激励され、やっと少しカーブ出来たとの事等、子どもは、何でも新しい経験は仲間に伝え、教え、体で体得して行くのにおどろかされる。

ある日、高校（同じ経営母体の私立男子校）より電話があり、学生を一人そちらに向わせるから、雪かたづけでも何でも力仕事をさせてほしいとの事、理由は、学校の規律に反し、謹慎処分として授業停止をし、幼稚園で何か労働させてほしいとの事であった。

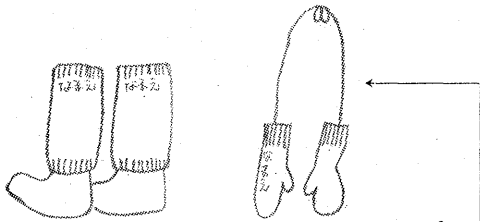
それで、園庭に雪の坂を作ってもらう事にした。その学生は、ふてくされたような、おこったような顔をし、ブラブラとやって

来た。見ると最新流行のヒールの高いブーツをはき、ポケットに両手をつっこんだままつっ立っている。働きやすいように用務のおじさんの長ぐつと軍手を貸し、庭に送り出した。しばらくいやそうに、雪かきとスコップを交換したり何となくダラダラと雪を集め積んでいた。それを見つけた子どもたちは「あ、僕たちの学校のお兄ちゃんだ」「坂作りに来てくれたの」「お兄ちゃんががんばって」「僕も手伝う」などと、五、六人の子はとび出して行き、終いには坂作りはそっちのけで、その学生と子どもたちは雪ぶつけをしたり、相撲をしたりで、あおいやいやした生気のなかった姿はどこへやら、あせと笑顔とさんばら髪になりながら子どもと過していた。……子どもたちにとっては、雪の坂のように春になったら記憶から消えてしまう経験であったかも知れないが、あの学生と、そして私共職員は、子どもが、あの学生に笑顔と生気を与えた事実を、そして教育にとって最も大切なものは何であるかを教えられ、わすれることの出来ない冬の日の一日となった。

こうして、私共は、子どもの夢中になって遊ぶ遊びや姿を通して、人と人との出会い、人と物の連りなど日々新しく知らされ、教えられながら、保育というわざの一役を荷負わせてもらっている。

そして、今後も子どもと共に感動したり、発見したり、子どもの喜びや悲しみを共感出来る大人でありたいと願っている。

(東奥義塾幼稚園)



ゴムあみも長目に。
毛糸であんだ手袋とクツカバーをして。

